



現代日本資料センター 写真データベース情報

坂口和子

最 新の電子技術を用いて、膨大な写真資料をデジタル映像情報としてデータベース化し、ビジネスや研究・学習に役立てようという試みが活発だ。日々大量に写真を生産している報道機関や商業写真業界では、効率的な写真の保存・整理・管理の面からばかりでなく、写真の貸し出し業務のインフラストラクチャーとして導入しているところが増えた。一方、教育の場でも写真や映像へのニーズが増大している。ビジュアル時代の学習観を反映してか、これまでの伝統的な授業形態では映像文化で育った学生の興味や学習意欲を掻き立てることは難しく、コンピューターを使った画像データはプレゼンテーションの資料やツールとして欠かせない。例えば歴史の指導では、インターネット経由の様々な史・資料を活用して、歴史的事象を多面的・多角的に考察する事はこれからますます求められるであろう。今回は、歴史、社会学、文化人類学などの学習にも役立つ、応用範囲の広い画像データベースのひとつである写真データベースを中心に紹介したい。

AccuNet/AP Photo Archive

<http://ap.accuweather.com/apphoto/index.htm>

AP Photo Archive

<http://photoarchive.ap.org>

写真をデジタル信号化した情報として、コンピューターの通信ネットワークを使って配信するサービスは、マスコミを中心に広がった。中でもアメリカの通信社アソシエテッドプレス（AP通信社）は、早くから通信衛星を使って新聞社や雑誌社など世界中に散らばるクライアントにニュースを配信してきた。「AccuNet/APフォトアーカイブ」は、同社が提供する写真情報をAccuWeather社のウェブサーバ

一上に登録したもので、世界最大規模のデジタル写真データベースである。1840年代から現代までのおよそ70万枚の写真を収録する。大半は1995年以降のものだが、古い歴史的な写真も随時スキャンしてデジタル化する一方、傘下の新聞社やフォトジャーナリストたちから送られてくる最新の画像を刻々と蓄積している。検索は「何が」「何時」「何処で」という空欄を埋めるだけの使いやすいもので、写真ばかりでなく、コンピューターのハイパーリンク機能を活かして、関連記事本文や図表、さらにはラジオ・テレビからのクリップなどへもジャンプできる。「AccuNet/APフォトアーカイブ」のコンテンツは、アソシエテッドプレス社が独自に提供する「APフォトアーカイブ」と全く同様のもので、両者の違いは単に、ターゲットとする顧客のタイプや利用目的と料金体系に拠る。「APフォトアーカイブ」が登録した新聞社や広告代理店など、企業を中心とした顧客向けの従量課金制による写真の貸し出しサービスであるのに対し、AccuNet/APフォトアーカイブは小・中・高及び大学や図書館などの教育・研究目的利用のみに限定され、購読価格もそれぞれの規模やレベルに順じて求めやすく設定されている。

毎日フォトバンク

<http://photobank.mainichi.co.jp/>

「毎日フォトバンク」は、創立130余年の長い歴史を持つ毎日新聞社の写真資料をインターネットで公開・貸し出しするデジタル写真データベースで、日本の新聞業界では最大規模を誇る。出版社や放送局などの企業ばかりでなく、インターネット上の一般読者も貸し出しサービスの重要なターゲットとしているため、誰でも無料でアクセスできるのがありがたい。保存状態が良く写真の劣化がほとんど無いのも特長で、明治期から昭和30年代までの写真12万枚、及び1998年1月以降の写真・図表をあわせ、現在約20万枚を収録する。未入力の1950年代から1997年までの写真は現在暫時入力されている

が、キャプションなどわからないものも多く、これまでにデータ化されたものは、既に貸し出し希望のあったものを中心におよそ1割弱で、残り部分の入力がいつ頃完了するのかは今のところ不明という。特筆すべき点は、毎日インターアクティブと旧JamJamに掲載された1997年8月以降の主要ニュース記事とハイパーリンクで繋がっていることで、インターネットならではのマルチメディアデータベースの機能が存分に活かされている。写真のデジタル化作業及び検索システム開発は、高精細画像アーカイブ分野におけるノウハウを持つ大日本印刷株式会社が担当した。

映像である写真を検索するには、その映像に表現された「情報」を説明する文字情報や、被写体の特色を分類・整理する必要があり、データベースの使い勝手は写真の属性データや書誌事項を含めたアクセスポイントの入力如何に拠るといっても過言ではない。「毎日フォトバンク」はその点実に細かく写真の情報を拾い出し、例えば「激怒」や「微笑」といった人物の表情を表す言葉もキーワードとして使うことができる。一般利用者が無料で検索・閲覧できるのは「サムネイル」と呼ばれる縮小画面のみだが、最高40枚まで一度に閲覧できる一覧用の小さいものとディスプレイ表示用のやや大きめのサイズの2種類がある。希望する写真を入手したい場合は申込画面に進みオンラインで注文することができる。毎日新聞社情報サービスセンターでの確認作業（写真の使用目的や媒体などの確認）を経た後、写真のポジ又は画像データの形態でユーザーに送られる仕組みだ。料金は学校教材用で2,000円、テキスト転載の場合はモノクロ写真で一枚6,000円、カラー写真は20,000円で、海外の場合は手数料その他の費用が加算され若干高くなる。因みに、本ニュースレター『通信』2001年秋号の巻頭論文に掲載された「モガ」の写真は、「毎日フォトバンク」の貸し出し注文サービスを利用したものである。



幕末・明治期日本古写真データベース (長崎大学)

<http://oldphoto.lb.nagasakiu.ac.jp/univj/>

1839年ダゲールによって発明された写真術は、誕生の翌年オランダ船によって長崎にもたらされ瞬く間に日本国内に拡がった。長崎大学が開発する「幕末・明治期日本古写真データベース」は、日本の写真文化発祥の地に伝わる貴重な歴史的写真「幕末・明治期の古写真コレクション」を電子化したものである。外国人居留地や観光地を中心とする日本各地の風景・生活・風俗を写しており、幕末から明治へ大きく移り変わっていく日本の姿を知る写真資料が豊富だ。また、撮影者が比較的はつきりしており、特に外国人の目が捉えた日本という視点は興味深い。総点数5,400を超える国内有数のこのコレクションは保存状態も良く、その多くは職業絵師と呼ばれた職人の手によって美しく彩色されている。日本語・英語のいずれからでも入れる4種類の検索画面は、使う目的に合わせて非常にわかりやすく配列されており、古写真に対する予備知識がなくても多角的な検索ができる工夫がなされているのは重宝する。例えば、フリーキーワード方式の検索は写真のタイトルばかりでなく解説文も含み、地図の検索画面から調べたい撮影地域の地図をクリックして簡単に写真を選ぶ事ができる。また、フリーキーワード検索の他に、86ものカテゴリに分類されたキーワード項目一覧や、撮影者・保管者・アルバム名一覧から該当の項目をクリックするだけで関連の物を探ことができ、これらの一覧表から初期写真史の中心人物の名前や項目を概観できるのは便利だ。

古写真データベース (日文研)

<http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/oldpe.htm>

国際日本文化研究センター (日文研) が提供する「古写真データベース」も、江戸末期から明治初期に撮影された手彩色写真の画像及

び書誌情報を提供しており、写真という当時の最先端メディアで記録された資料を通して、明治期を実感できる学習に役立つ。収録された写真のタイプや規模、及び日本語・英語いずれでも検索できるという点では、前述の長崎大学版古写真データベースときわめて類似する。しかしながら検索画面のレイアウトや使い勝手には大きな違いがあり、該当項目をクリックするだけで何らかの検索結果が得られるというわけにはいかない。フリーキーワードのみの「簡易検索」及び、キャプション、注記、撮影者の項目の空欄を埋めて絞り込む「詳細検索」のいずれも検索語を入力する必要があるが、キーワードの候補に上げられた語彙が少なく、効率よく検索するには多少の古写真に関する知識を要するであろう。一方、検索語の前方一致あるいは中間一致などのトランケーションや、検索経歴が一覧できるのは便利で、この種の「古写真データベース」では他に見られない機能である。日文研の古写真コレクションは、海外で出版された日本文化紹介の欧文図書から抽出した写真や挿し絵などの画像・書誌情報を提供する「外像データベース」にも多く収録されており、例えば「芸者」のように、件名によってはむしろこの「外像」からより多くの検索結果を得られることもある。また、「外像」、「古写真」及び「日本美術」の各画像データベースをキーワードにより横断的に検索するシステムもついている。

古写真データベース (東京大学史料編纂所)

<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/gazo/gazo.html>

東京大学史料編纂所版「古写真データベース」は、既述の「古写真データベース」2種とほぼ同時期に撮影された写真を収録するが、大きな違いは撮影場所や対象が日本国内だけに限られていない点で、岩倉遣外使節団訪欧時に入手された多くの西欧文物・人物も含まれる。幕末・明治期に活躍した人物から経歴不明の人物にいたる

まで、肖像写真を多く収録しており、ここで紹介した3種類の「古写真データベース」の内では、唯一、第15代将軍徳川慶喜の写真がある。検索閲覧は無料だが学術研究目的のみに限り、アクセスには利用の都度オンラインで「公開用データベース利用届」を記入し提出することが義務づけられている。ANDとORの組み合わせの利くキーワード検索を基本に、和暦で絞り込むことや、さらに、被写体区分、撮影者、写真技法の項目では、それぞれ列挙された該当件名の欄をチェックして絞り込むこともでき非常に使い勝手がよい。検索結果はサムネイルで最高100枚まで一覧表示され、タイトルと撮影者名及びその検索内における通し番号がつけられ、この番号をクリックすると写真を説明する文字情報が現れる。撮影者の欄に世界で最初の空中撮影を行ったフランスの著名な写真家ナダールの名が出ているが、彼の撮影になるものが合計50枚も含まれており、いずれもパリで撮影されたもので、中には遣欧使節随員として当地を訪れた福沢諭吉の写真もある。惜しむらくは、シソーラスのコントロールが出来ていない点で、ナダールの撮影した多くが武士装束の人物像であるにもかかわらず、「武士」ではわずかに1件、「さむらい」「サムライ」「侍」ではいずれもゼロの検索結果となる。

平和データベース (広島平和文化センター)

<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/peacesite/index.html>

歴史の証言資料でもある写真をデジタル化する意義は、単にアーカイブとして保存するというだけではなく、マルチメディアで広く伝え人々の理解を深めるところにあるだろう。財団法人広島平和文化センターが管理する「平和データベース」は、核兵器廃絶への強い願いを込めた文字情報、画像情報に加え、音声情報をも含むマルチメディアデータベースである。戦後半世紀以上が経ち風化する被爆の実相を後世に伝え人々の理解を深めるとともに、平和に関する調



査・研究に資することを目的として、広島平和記念資料館収蔵の1万2千点を超えるすべての被爆資料をデータベース化しインターネット経由で公開している。世界で唯一の被爆国として、被爆の惨禍を半永久的に保存し、世界平和への希求を世界へ向けてマルチメディアで伝えようという試みでもあり、写真の持つインパクトを最大限に活かした情報発信としての側面を持つ。写真の他に、被爆者証言ビデオ、米国戦略爆撃調査団撮影被爆者面接フィルム、原爆記録映画、及び原爆・平和関連ドキュメントフィルムなども収録されて

いる。20項目からなる書誌事項が充実しており、収蔵品の内容説明が丁寧で、且つ高度なANDとORの項目組み合わせ検索方法が豊富にある。さらに、検索結果を昇順・降順に並べ替えることもできる。

ネガから印画紙にプリントすることによって完成する写真は、湿度や温度を一定に保たなければ劣化し情報が失われてしまうが、写真データベースはデジタル信号のため、年とともに色があせたり、劣化したりすることもなく、ネガやプリントに比べていつまでも最初

の画質を維持できる。デジタル保存することによって、貴重な財産である写真やフィルムなどの品質劣化・破損・紛失などが防止できるという直接的なメリットの他に、便利な検索機能によって歴史的報道写真も簡単に選べダウンロードできるようになった。今後ますます多様な活用の仕方が注目される写真データベースは、21世紀の印刷革命あるいは電子図書館構想をさらに華麗に推し進めていくことは間違いないようだ。

